



第 9 号
平成 26 年 4 月 7 日
岩手県長寿社会課

「顔の見える関係づくり」に取り組む 「医療と介護の連携連絡会」(一関市) の巻

一関市では、**県地域医療・介護連携モデル推進事業**の指定を受け、「医療と介護の連携連絡会」主催による医療・介護従事者のための研修会、市民フォーラムなど様々な事業が行われています。今回は、医療従事者と介護従事者が連携し、地域の高齢者に円滑にサービスを提供する仕組みづくりの一端を取材しました。

今回のおはなし

「医療と介護の連携連絡会の取組」

一関市保健福祉部健康づくり課地域医療推進係
主任主事 千葉 健一 さん
(一関市医療と介護の連携連絡会 事務局)

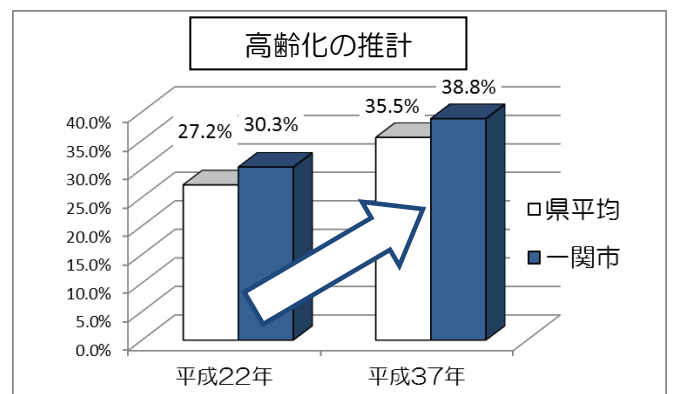
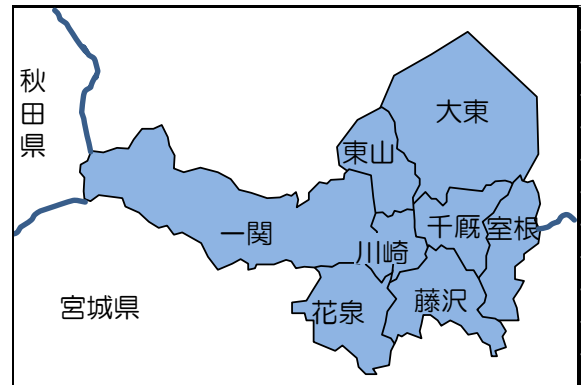


一関市の概要

一関市は平成 17 年、23 年の合併により、県内第 2 位の人口・面積を有する県南の中東北の拠点を目指す都市です。

また、高齢化社会を見据え、高齢者ができる限り住み慣れた地域で自分らしい生活を送るために、医療、介護、住まい、生活支援、介護予防が日常生活の中で適切に提供されるよう「地域包括ケアシステムの構築」を目指しており、特に医療・介護の連携推進に努めています。

- 人口 126,589 人
- 65 歳以上人口 (高齢化率) 39,034 人 (30.8%)
※ 県平均 (27.2%)
- 要支援・要介護者数 (認定率) 8,094 人 (20.7%)
- 日常生活圏域 9 圏域
(一関 1、一関 2、花泉、大東、千厩、東山、室根、川崎、藤沢)
- 地域包括支援センター数
6 か所 (一関西部、さくらまち、はないずみ、一関東部、しぶたみ、ふじさわ)
ランチ数 18
※ 9 日常生活圏域を 6 地域包括支援センターで担当
(以上平成 25 年 4 月 1 日現在)



一関市の地域・医療介護連携モデル推進事業の取組経過

地域医療・介護連携モデル推進事業指定の背景としては、

- 宮城県北地域も含めた両磐圏域での連携の必要性
- 県立、公立、民間病院が地域内各地に配置され、医療連携の必要性
- 藤沢病院を中心とした「地域包括ケアシステム」の取組を契機とし、市全体に「医療と介護」連携の意識が波及していた

という3つの要因があります。

また、東日本大震災による被災者支援を通じ、医療と介護の連携の重要性が強く意識されるようになったことが、大きな理由としてあげられます。

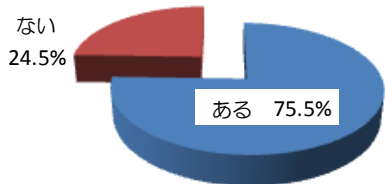
まず初年度の取組として、「**医療と介護の連携に関するアンケート調査**」(平成23年10月～11月)を実施し、地域における現状や課題を明らかにしました。

ケアマネジャーとかかりつけ医双方が「概ね連携がとれている」と感じている一方で「**連携が図れていないと思ったことがある**」という回答も多くありました。(↓下表)

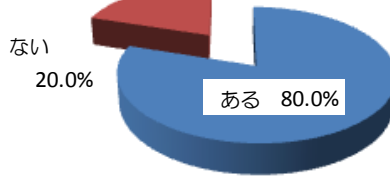


医療と介護の連携に関するアンケート調査

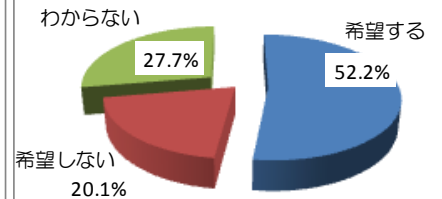
ケアマネジャー：かかりつけ医と連携が図れないと思ったことがありますか？



かかりつけ医：ケアマネジャーと連携が図れないと思ったことがありますか？



住民：医師と介護職員がもっとお互い連携して治療や介護にあたることを希望しますか？



(ケアマネジャー97人、かかりつけ医58人、住民173人の回答)

このため、平成23年度末には医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、医療機関、ケアマネ事業所、地域包括支援センター、振興局及び保健所、一関地区広域行政組合(保険者)等により構成される「**一関市医療と介護の連携連絡会**」(事務局：一関市健康づくり課)を設立し、医療と介護の連携に努めるとともに、25年度からは平泉町も含め取組を更に強化しています。

「一関市医療と介護の連携連絡会」の最も重要な役割は、**医療と介護の円滑な連携のための研修会等**を通じた「**顔の見える関係づくり**」であり、こうした円滑な連携体制を構築することにより利用者の方々、地域住民の皆さんにより良いサービスが提供できるものと考えています。



※活動の詳細は <http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/index.cfm/8,44639,56,html> を参照

～研修会を通じた医療と介護の「顔の見える関係づくり」～

一関市医療と介護の連携連絡会研修会

レポート

日時：平成26年3月1日（土）13時30分～16時40分

場所：一関市東山地域交流センター



この日は、今年度6回目となる研修会で、「在宅・施設での口腔ケアについて」をテーマに講義とグループワークが行われ、市内の医療・福祉関係者40人が参加し、活発な意見交換が行われました。

1 講義「在宅・施設での口腔ケアについて」

講師 一関歯科医師会会長（連携連絡会幹事）

久保田 文吾先生



研修会の前半では一関歯科医師会会長の久保田先生から高齢者の口腔ケアについてわかりやすい講義がありました。

高齢になると歯は・・・

■歯の数が減少（平均 75-79歳 15.6本→85歳以上 **8.4本**）

■嚥下能力の低下

■高齢者の虫歯の特徴

根面カリエス（歯茎が下がり、象牙質がむき出しとなり虫歯の進行が早い）

歯周病（歯組織周辺の疾患の総称）

かみ合わせの変化、口の乾燥 などの特徴があります。



唾液の役割について

特に口の乾燥を防ぐ唾液の役割は重要であり、

■消化酵素（唾液アミラーゼ）による消化促進

■口腔組織運動の際の潤滑油としての役割

■抗菌作用

■緩衝作用

■再石灰化作用 など様々な機能があります。

高齢者の口腔ケア

口腔内状態の評価（アセスメント）を行いながら口腔ケアを進めます。

口腔ケアのコツとして、マッサージにより舌や唾液腺を刺激し、唾液腺の分泌を促すことが効果的です。

また、一関市が寝たきりの高齢者の方を対象に行う「家庭訪問歯科診療」の活用の呼びかけがありました。



2 グループワーク・発表

久保田先生の講義の後、日常の施設や事業所、居宅での高齢者の口腔ケアについての気づき、疑問点、対応方法、意見などの情報交換が行われました。

研修会のグループワークはブレインストーミングとKJ法によって進められています。



①様々な意見をカードに記載



②関連のある意見をグループ化



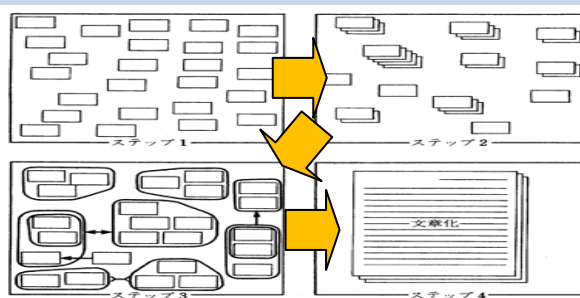
④各班から意見、情報交換の内容が発表され、質疑応答など活発な意見が・・・。

ブレインストーミングのルール

- 1 人の発言を一切否定しない
- 2 自由奔放、非現実的（夢物語）発言を大歓迎
- 3 量より質を求める
- 4 他人のアイデアに便乗する

KJ法

- ①テーマの思いつく情報を出しポストイットに記入
- ②関連するカードをグループ化
- ③グループにタイトルを付け、配置を整え図解化
- ④文章化、新たなアイデアを出す



③グループ化したテーマに対し、様々な情報、意見が！



グループワークでの主な意見



医師、施設・居宅事業所、養護老人ホーム等様々な立場の参加者が意見交換をしました。

課題（疑問点、苦慮している点など）

- 認知症高齢者、嚥下機能の低下した高齢者の口腔ケアのむずかしさ。
- 口を開けっ放しにしている方への乾燥対策。
- 入所・通所サービス事業所への訪問診療に対し居宅への訪問診療は提供困難。
- 嚥下困難者に対する吸痰対応できる職員は少数である。
- 限られた職員で大勢の利用者口腔ケアを行うことは困難である。

情報交換（改善策・具体的内容など）の内容

- 一関市健口！歯ッピー塾、施設・事業所での訪問診療の対応事例。
- 口腔低癌の患者さんに対し、歯科衛生士と連携することにより対応できたこと。
- 義歯が壊れてしまった在宅高齢者に対し、訪問診療で対応できたこと。
- 口を開けっ放しにしている方についても定期的に口腔ケア（ブラッシングなど）を行うことが大切（久保田 Dr）

まとめ（大切だと思うこと）

- 日常的な口腔体操や予防のケアが大切！
- 歯科医・歯科衛生士との連携体制を確立しましょう！
- 一関市の訪問歯科診療を利用しましょう！

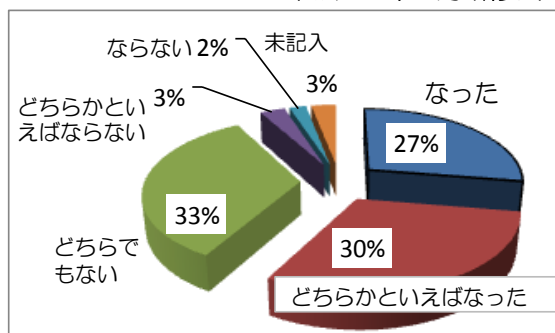
なお、今回の研修会では、千厩地域で介護と連携した在宅医療に積極的に取り組んでおられる谷藤内科医院の谷藤院長が参加し、意見交換や質疑でもリードしていただきました。参加者の皆さんは共通の悩みを持った者同士であり、グループワークのディスカッションが進むにつれてかなり打ち解けた様子でした。

研修会での意見や情報交換を通じ、**医療従事者と介護従事者の顔の見える関係づくり**を今後とも進めていきます！

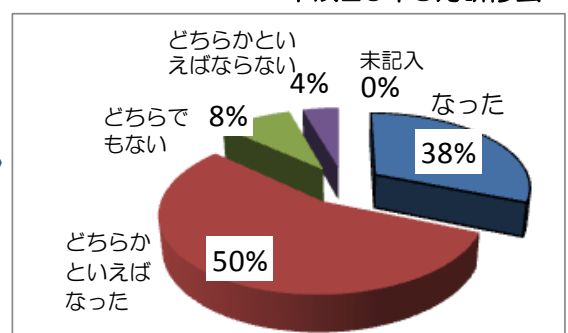
継続していくことが大切！

「よい連携」を作る上でこの研修会は良い機会となりましたか？（参加者アンケート）

平成25年2月研修会



平成26年3月研修会



インタビュー

「一関市医療と介護の連携連絡会」において、医療と介護の連携体制づくりに御尽力されている、幹事長の長澤 茂先生（一関市医師会顧問）にインタビューしました。

大変優しくそうなお人柄で、静かな口調で語っていただきました。その言葉の中から、地域住民のための医療と介護の連携への熱い思いが伝わってきました。



まず、この両磐圏域で医療・介護連携に取り組まれるきっかけを教えてください。



県立磐井病院附属花泉地域診療センターが、採算性を理由に国の政策で無床化を余儀なくされたとき、花泉の人達の地域医療をどう守るかという大きな問題がありました。一関は宮城県、秋田県に隣接しており、広域で存在する多くの**医療機関が助け合い、花泉の人達を医療と介護の連携で支えようという体制が背景にあり**、連携に取り組むこととなりました。



連絡会がスタートした平成 23 年度当時、医師会、介護関係者の皆さんの反応はいかがでしたか？



花泉の件もあり、圏域全体の医療と介護で地域の方達を支えようという機運が既に高まっていたので皆さん、非常に協力的でした。

ただ、当時はまだ医療と介護の連携がどうあるべきかまでは深く考えていなく、実際に他の圏域の情報を把握していないのが実態で、漠然と風通しを良くしなければと思っていました。

2011 年の東日本大震災で、一関市医師会は県立高田病院と宮城県気仙沼病院を連携して応援するなど、関係者が一層助け合うという気持ちになりました。



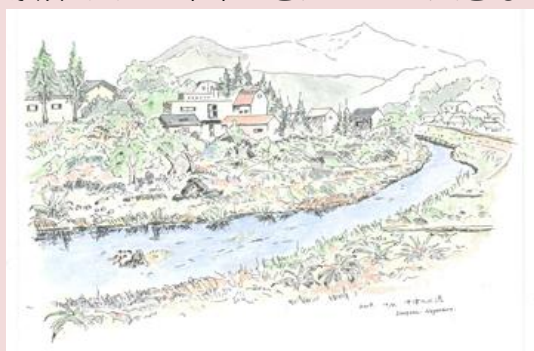
平成 23 年度から連絡会の活動を続けてこれ、関係者（参加者）の方の意識が変わったと感じることはありますか？



一番大きなことは、医師会が在宅医療を推進する委員会を立ち上げたことです。

次に、連絡会設立時に他の医師に協力を依頼した結果、6人の医師からなるチーム「いわい西」という機能強化型の在宅療養支援診療所（※）が昨年できたことも大きな動きです。歯科医師会、薬剤師会の皆さんとも連携がとれるようになり、私たちが訪問診療を行う際に「口腔ケア」に着目するようになりました。歯科医師会の皆さんも対応し、活動していただいています。

※在宅医療を希望する患者をチームの医師がかかりつけ医となり、症状に応じた訪問診療を実施。専門分野を活かした訪問診療が可能。



水彩画「中津川上流」（長澤 茂）



医療・介護連携という点では一関市は先進地であると思いますが、何か課題として感じているところがありますか？



私たち医師がかなり連携できたと思っても、例えば介護従事者の方はまだ、壁があると感じる方もいるかもしれません。日頃から申しておりますが「**顔の見える関係づくり**」を地道に続けていくことが大切だと思います。



一関市は、面積が広大で人口密度が低いなど、在宅医療を推進する上で難しい点があると思われませんか？



一関市は8市町村が合併した非常に広域にわたる市です。医療環境という観点では人口10万人あたりの医師数が全国平均206.3人に対し、一関市は約170人、一関西部地域は200人を少し超え、医療環境は恵まれています。東部は100人に満たないなど非常に格差があるという難しい状態です。ただ、そのような地域でも在宅医療に着手していただける医師が少しずつ出てきており、改善されていくと思います。



取組が遅れている地域もまだまだありますが、そのような地域に向けてメッセージやアドバイスがあればお願いします。



日本医師会は在宅医療を推進しています。しかし、中には病院で患者対応に追われ、手が回らない医師もいると思います。多くの医師が自分のあるべき姿で一生懸命医療に従事しているのであれば、一律には進みません。ましてや岩手県33市町村のうち22市町村が過疎（みなし、一部過疎を含む。）です。東京のような大都会とは異なり、その地域にふさわしい医療・介護連携のあり方があると思います。過疎、少子高齢化、人口減少、一人世帯の増加など**市町村がそれぞれもつ環境に適応した方法で知恵を出し合っていくことが大切**ではないでしょうか。岩手版の、一関版の、市町村ごとの医療と介護の連携があってしかるべきと思います。



最後に、連絡会の活動を通してこれからの抱負をお聞かせください。



私たちは一生懸命活動していますが、最後に評価してくださるのは住民の皆さんです。そのことを非常に大切に、活動の内容を広報し、**住民の皆さんが安心して相談していただけるような地域**にしたいと思います。



水彩画「北アルプス 安曇野」(長澤 茂)

取材を終えて・・・

一関市では、今回特集したような医療と介護をつなぐ研修会を、これまで数回にわたり開催し、好評を得ているところです。今回の研修テーマである「口腔ケア」は、施設・在宅を問わず、お年寄りが快適に暮らし続けていくためには重要なことです。しかしながら、介護予防などでは、運動訓練などの影に隠れがちであったように思います。このような研修により、「命の入口」であるお口の健康について、関係者の認識がより深まるといいですね。

若いうちは「普通に歯があって、食べられること」への感動が薄く、歯のメンテがおざなりになりがちなので、今回の研修スライドにあったような「悲惨なお口」にならないよう、気を付けたいと思います。

最近、各地でKJ法によるグループワークを目にする機会が多くなりました。参加される方々の真剣な表情と、堅苦しくない雰囲気づくりにはいつも感心させられます。中には、即興でバイキンマンの絵を描く方もいるなど、ゆるい感じに心が和みました。

本当の連携は、この先が勝負！単なる「前に会議で見かけた人」で終わるか、その後の業務に関する相談や助言を通じ、貴重な「ビジネスパートナー」になるかは、皆さん次第ですよ。連携に「奥ゆかしさ」は不要。せっかくの機会はどんどん活かしましょう。

(なんでも取材班「い」)

介護の現場で、介護従事者からよく聞かれる言葉が「医師との敷居の高さ」です。

病院事業を行う医療機関は、住民のために地域医療を担う一方で、当然、事業の採算性も求められています。診療報酬の加算などを算定するために、評価の実施やカンファレンスを開催するなど、医師は多忙を極めます。また、介護保険でも主治医は、要介護認定の「意見書」を作成するという介護保険事業の根幹に深く関わっています。

私が常に思っていたことは、医療と介護に重要な役割を担う医師の理解が深まれば、自然とその地域の医療と介護が連携するであろうし、その逆もしかりであるということです。

今回の取材では、長澤先生から医療・介護の連携を地域で根付かせようという熱い思いが感じられました。研修会でも、講演を行った久保田先生や、グループワークに参加しリードしていただいた谷藤先生も、自らが問題提起や意見交換を行い、積極的に介護従事者との関係づくりに努めておられる様子がひしひしと伝わってきました。

一関市の取組は、連携連絡会の研修会を何度も重ね、医師だけの力ではなく、「顔の見える関係づくり」を地域全体に根付かせることが目的です。

もちろん、研修会で知識を深めることは大切ですが、もっと大切なのは医療従事者と介護従事者が共に考え、意見を出し合う場を経験することで良い関係が生まれ、普段の業務が円滑に進められることです。それが結果的により良い住民サービスにもつながります。

わかっている、なかなか実践していくことは難しいですよ。これからも一関市の取組に注目したいと思います。

(なんでも取材班「お」)

「ちいきで包む」は、岩手県内市町村の地域包括ケアシステム構築をアシストするため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行（問合せ先）

岩手県保健福祉部長寿社会課（本号担当：岡本・藤原）平成26年4月7日発行

TEL:019-629-5432 FAX:019-629-5439 E-mail:AD0005@pref.iwate.jp